

[010]ポリモルフィア表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7347442>

出版情報：ポリモルフィア. 10, 2025-03-21. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



理工系分野のジェンダー平等達成度を国際調査で視覚的に明らかに ～ジェンダーバイアスのない組織作りに役立つことを期待～

大学におけるジェンダー平等は、女性教員や女性学生の割合などで評価されるのが一般的です。しかし、女性の割合が増えるのを待つだけで、日本の大学にジェンダーバイアスのない学術的風土が醸成されるとは限りません。特に理工系（STEM）分野におけるジェンダーギャップ問題は、科学技術イノベーションにおける多様性確保、ジェンダー視点の重要性が要求されながらも、遅々として進んでおらず、次世代への影響が危惧されます。STEM分野については、2020年にアメリカ国立科学財団（National Science Foundation: NSF）において「大学は機関、学部、学科レベルで具体的な問題を特定し、対策を講じるべきだ」との見解が示されたにも関わらず、これまで部局ごとの状況を定量的に評価する手法は世界的に見てもありませんでした。

今回、九州大学と東京工業大学（現東京科学大学）は、カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）と連携し、大学の各部局（学部・学科）におけるジェンダー平等の達成度を、論文業績の男女比較を通じて定量的に評価する方法を考案しました。そして、これを女性教員割合、女性教員絶対数とともにバブルチャートにまとめたものを「学術的男女平等指標（Academic Gender Equity Index: Academic_GEI）」と名付け、日本/米国/EUの代表的な大学のSTEM関連部局の実態を調査しました。

その結果、当初の予想通り、米国/EUの大学は

日本の大学に比べてはるかにジェンダー平等な研究環境が整っていることがデータで明らかになりました（図1）。さらに興味深いことに、女性教員の割合（X軸）と論文業績（Y軸）の間には明確な相関関係は見られず、むしろ部局における女性教員の絶対数が女性教員の論文業績に大きな影響を与えることがわかりました（図2）。すなわち女性間のネットワーク構築による職場での心理的安全性確保が女性の活躍促進に重要であることが示唆されました。

ジェンダー問題解決には、部局（研究分野）の

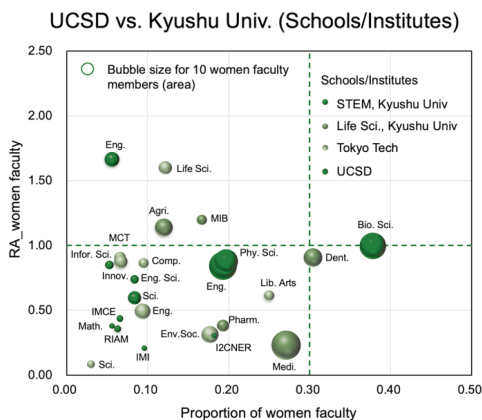


図1 Academic_GEIによる日米大学の比較
チャートの横軸は女性教員比率、縦軸は女性教員の論文業績の相対値（1.0の場合、論文業績に男女差がない）、バブルサイズは部局の女性絶対数である。UCSDでは女性教員比率が日本の2倍以上であるだけでなく、論文業績に男女差が見られない。

●：九州大学（理工系部局）、●：九州大学（生命系部局）、●：東京工業大学、●：UCSD（理工+生命科学系部局）。

個性に合わせたきめ細やかな対応が必要です。大学の部局ごとのジェンダー平等達成度を定量的に評価できるこの手法は、国の違いを超えて、ジェンダーバイアスのない組織作りに役立つと期待されます。

本寄稿は、2021～2022年度実施した文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（調査分析）「女性活躍指標に基づく女性研究者活躍促進に関する国際調査」での調査研究成果について、国際誌 International Journal of Educational Research Open (IJEDRO、Elsevier) にて公開した内容を紹介したものです [1]。

(ダイバーシティ担当副学長／男女共同参画推進室 副室長／先導物質化学研究所 玉田 薫)

[注]

[1] Evaluation of the Gender-Neutral Academic Climate on Campus for Women Faculty in STEM Fields, K. Tamada, E. Jotaki, N. Tsukamoto, S. Sagara, J. N. Kondo, M. Mori, M. Waga and S. Brown International Journal of Educational Research Open (IJEDRO), Vol.7, 100390 (2024).

DOI: 10.1016/j.ijedro.2024.100390

九大プレスリリース (2025.10.22) https://www.kyushu-u.ac.jp/f/59267/24_1022_01.pdf

九大定例記者会見 (2025.12.20) <https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publicity/press/>

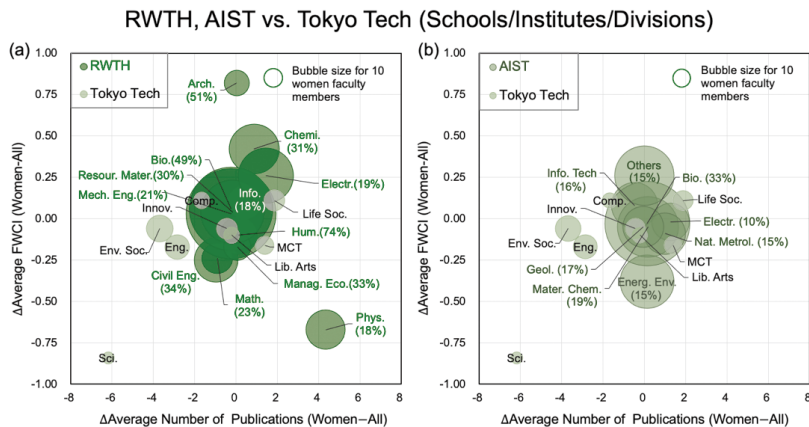


図2 論文業績と女性教員絶対数との相関
チャートの横軸は論文数の女性平均と部局平均の差、縦軸は論文インパクト (FWCI) の差である。女性絶対数 (バブルサイズ) の大きな部局ほど、プロットが原点を通り、論文業績に差がない。

● : 東京工業大学、● : ドイツアーヘン工科大学、● : 産業技術総合研究所

QURIES プログラム令和6年度実施報告

プログラムの目的

令和6年8月に、今回で4回目となる女子高校生の理工系研究インターンシップQURIESプログラムを伊都キャンパス、および筑紫キャンパスにて対面で開催しました。「QURIESプログラム（以下、本プログラム）」の名称は、Kyushu (Q) University Research Internship in Engineering and Science と、女性科学者のパイオニア、マリ・キュリー (Curie) 博士の名前とを合わせて名づけられています。

九州大学（以下、本学と表記）は本プログラムを通じ、広く女子高校生の理工系分野への興味・関心を喚起するための支援を行います。それにより理工系分野の研究者を目指す女子学生の裾野を拡大し、学術研究の将来を担う優秀な若手理系女性研究者・技術者を育成することで、九州から世界へ羽ばたく女性を一人でも多く輩出する事を目指しています。大学進学前の意欲あふれる女子高校生に本学の先端的な研究環境の一旦に触れる機会を提供するとともに、本学教員をメンターとし、座学では分からない研究活動の体験の場を提供します。

本プログラムは本学名誉教授で世界的に著名な科学者であった故伊藤早苗先生のご遺族からの寄付金により運営しています。学生や若手研究者の育成に尽力された教育者でもあった伊藤先生のご遺族から、「若い人たちが大学進学前に理系分野

の研究の面白さ、楽しさを体験する場を創るサポートをしたい」とお申し出があった事をきっかけに企画されました。

今年度の実施状況

今年度のQURIESプログラムは、8月5日から9日までの5日間の日程で実施しました。前年同様、福岡市及び近郊の公立と私立の14高校に推薦を依頼して最大28名の女子高校生を募集した他、今年度から募集人員を拡大し、福岡県内の高校に在籍する女子高校生若干名の枠を設け、合計で最大35名の募集を行うこととしました。多数の応募があったため選考を行い、高校1年から3年までの計36名を19研究室に配属しました。

まず、プログラム初日（8月5日）に伊都キャンパス稲盛財団記念館稲盛ホールで行われたオリエンテーションにて参加者全員が一堂に会しました。オリエンテーションでは、神崎智子理事（男



オリエンテーション

女共同参画推進室長)からの挨拶、萩島理副学長(ダイバーシティ担当)からプログラムの趣旨や注意事項の説明が行われました。続いて、本学若手女性研究者2名による講演が行われ、その後、受講生は受入教員や大学院生の引率により配属された研究室へ移動し、午後から実験や分析などの研究活動を開始しました。最終日(8月9日)の



受け入れ研究室での研究活動の様子

午後に行われた研究活動報告会での受講生の報告内容からは、各研究室において研究の楽しさや面白さを感じる体験ができるよう尽力いただいたことがうかがわれました。研究活動報告会には各研究室から受入教員や大学院生等が多く参加し、研究内容へのコメントだけでなく、受講生の能力の高さに驚く声や、将来ぜひ一緒に研究したいという期待の言葉などが寄せられました。研究活動報告会の閉会にあたり、神崎智子理事から挨拶があり、受講生の顔つきが生き生きとして自信に満ちた表情に変化したことが伝えられました。次いで、玉田副学長(男女共同参画推進室副室長)から、未来の女性研究者である受講生への激励と、研究報告に対する講評がありました。その後、受講生と関係者全員で集合写真の撮影を行い、プログラムの全日程を終了しました。

今年度も受講生の報告をまとめる形での実施報告書を作成しています。修了後に実施した参加者アンケートからは、「高校ではできないスケールの大きな実験を経験できた」、「実験を失敗した時に共に考えを出し合って結果を導こうとする研究室全体の姿勢が印象的だった」と、研究活動の一端に触れた様子が分かりました。また、大学院生から指導を受け、実験機器に触れるなど、研究室の雰囲気を実際に味わったことで大学や研究室をより身近に感じるきっかけにもなったようでした。多忙な時期に受け入れていただいた研究室側からも「高校生の頑張る姿を見て指導学生が良い刺激を受けた」、「エネルギーを分けてもらい教える喜びを再認識した」と好意的な感想が寄せられました。



全体集合写真

これらの結果を踏まえ、次年度以降もさらに本プログラムを発展させていく予定です。

QURIESプログラムに関する詳細は男女共同参画推進室のホームページからご覧いただけます。

<https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/upbringing/qries.php>

(男女共同参画推進室 加藤悠紀)

令和6年度九州大学 QURIES プログラム 受講生一覧

No.	受入研究室 代表者氏名	職名	所属 (学部担当)	受講生氏名	受入 人数	演習 場所
1	堺 裕輔 池上 康寛	准教授 助教	工学研究院化学工学部門 (工学部化学工学科)	1 福岡大学附属大濠高等学校	3年	4名 伊都 キャンパス
				2 福岡県立城南高等学校	2年	
				3 福岡県立東筑高等学校	2年	
				4 福岡県立修猷館高等学校	1年	
2	山崎 重人	准教授	工学研究院材料工学部門 (工学部材料工学科)	5 福岡県立中間高等学校	3年	1名 伊都 キャンパス
3	田中 將己	教授	工学研究院材料工学部門 (工学部材料工学科)	6 福岡工業大学附属城東高等学校	2年	2名 伊都 キャンパス
				7 福岡県立八女高等学校	2年	
4	宗藤 伸治	教授	工学研究院材料工学部門 (工学部材料工学科)	8 福岡県立嘉穂高等学校	3年	1名 伊都 キャンパス
5	キーリー アレクサンダー 竜太	准教授	工学研究院環境社会部門 (工学部土木工学科)	9 福岡県立香住丘高等学校	2年	2名 伊都 キャンパス
				10 福岡県立修猷館高等学校	1年	
6	山西 陽子	教授	工学研究院機械工学部門 (工学部機械工学科)	11 福岡県立嘉穂高等学校	3年	2名 伊都 キャンパス
				12 福岡県立輝翔館中等教育学校	3年	
7	山城 賢	教授	工学研究院附属アジア防災研究センター (工学部土木工学科)	13 福岡県立福岡中央高等学校	3年	2名 伊都 キャンパス
				14 福岡県立筑紫高等学校	3年	
8	伊良皆啓治	教授	システム情報科学研究院情報学部門 (工学部電気情報工学科、共創学部)	15 西南学院高等学校	2年	2名 伊都 キャンパス
				16 福岡県立筑前高等学校	1年	
9	池田 大輔	准教授	システム情報科学研究院情報学部門 (理学部物理学情報理学コース)	17 筑紫女学園高等学校	1年	1名 伊都 キャンパス
				18 福岡県立福岡中央高等学校	3年	
10	藤平 晴奈	助教	システム情報科学研究院情報学部門 (工学部電気情報工学科)	19 福岡県立福岡高等学校	1年	3名 伊都 キャンパス
				20 福岡工業大学附属城東高等学校	1年	
				21 福岡県立福岡高等学校	1年	
11	湯浅 裕美	教授	システム情報科学研究院情報エレクトロニクス部門 (工学部電気情報工学科)	21 福岡県立福岡高等学校	1年	1名 伊都 キャンパス
12	加藤 和利	教授	システム情報科学研究院情報エレクトロニクス部門 (工学部電気情報工学科)	22 西南学院高等学校	3年	1名 伊都 キャンパス
13	松本 広重	教授	カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所 (工学部機械工学科)	23 福岡県立香住丘高等学校	2年	2名 伊都 キャンパス
				24 筑紫女学園高等学校	1年	
14	濱村奈津子	教授	理学研究院生物科学部門 (理学部生物学科動態生物学)	25 福岡県立八幡高等学校	3年	1名 伊都 キャンパス
15	中村 真子	教授	農学研究院附属国際農業教育・研究推進センター (農学部生物資源環境学科国際コース、動物生産 科学コースアニマルサイエンス分野、共創学部)	26 福岡県立筑紫丘高等学校	2年	2名 伊都 キャンパス
				27 福岡県立八女高等学校	2年	
16	久米 朋宣	教授	農学研究院環境農学部門 (農学部生物資源環境学科地球森林科学コース、 森林機能制御学分野)	28 福岡県立春日高等学校	3年	3名 伊都 キャンパス
				29 福岡県立春日高等学校	2年	
				30 福岡県立伝習館高等学校	2年	
17	風間 智彦	准教授	農学研究院生命機能科学部門 (農学部生物資源環境学科応用生物学コース、 応用生命化学分野)	31 福岡県立城南高等学校	2年	2名 伊都 キャンパス
				32 福岡県立筑前高等学校	2年	
18	寒川 義裕	教授	応用力学研究所新エネルギー力学部門 (工学部融合基礎工学科物質材料コース)	33 福岡県立筑紫高等学校	3年	2名 筑紫 キャンパス
				34 福岡県立筑紫丘高等学校	2年	
19	浜本 貴一	教授	総合理工学研究院エネルギー科学部門 (工学部融合基礎工学科機械電気コース)	35 福岡雙葉高等学校	2年	2名 筑紫 キャンパス
				36 福岡県立東筑高等学校	2年	
					36名	

令和6年度九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞 (伊藤早苗賞)

令和6(2024)年度受賞者は、以下のとおりである。なお、本賞は、学術研究の将来を担う優秀な女性研究者の育成に資することを目的として、平成30(2018)年度に創設され、令和2(2020)年度から伊藤早苗基金によって運営されている。

【若手女性研究者部門】

〈最優秀賞〉

王 振英 (大学院工学研究院・助教)

「Wetting and Phase Change of Multicomponent Thermofluids」

〈優秀賞〉

柳 愛林 (大学院法学研究院・准教授)

「近代日本におけるアレクシ・ド・トクヴィルの政治思想の受容」

María Belén ALFONSO (応用力学研究所・准教授)

「Presence and impact of microplastic pollution in marine and freshwater aquatic environments」

【女子大学院生部門】

〈最優秀賞〉

中井 鴻美 (大学院生物資源環境科学府・博士3年)

「転流機構と群落不均一性に基づく次世代収量予測：収量構成情報の変動・分布の可視化」

〈優秀賞〉

逢坂 由貴 (大学院地球社会統合科学府・博士1年)

「外国にルーツを持つ親子と就学前教育の機会についての研究」

永江 栞奈 (大学院生物資源環境科学府・博士2年)

「オンガスジシマドジョウの生態・生活史の解明」

次頁以降では、各部門の最優秀賞受賞者のコメントと受賞内容を紹介する。なお、以下のウェブサイトから、各受賞者の受賞コメントおよび研究紹介を閲覧できる。

https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/notice/view.php?cId=3167&page=0&r_search=&



2024年11月28日
受賞者表彰式にて

若手女性研究者部門 最優秀賞 研究紹介

「Wetting and Phase Change of Multicomponent Thermofluids」



王 振英
九州大学大学院
工学研究院
助教

この度は、令和6年度伊藤早苗賞（女性研究者部門）最優秀賞を賜り、大変光栄に存じます。高田保之教授、高橋厚史教授、井上智博准教授をはじめ、サポートいただきました先生方、研究室の皆様と家族に深く感謝申し上げます。

私の研究は、蓮の葉のセルフクリーニング、工業製品のコーティング、AIチップの液体冷却など、自然界や産業におけるさまざまなプロセスを支配する液体と固体の相互作用の基礎科学に焦点を当てている。特に、私は複雑な（多成分）液体の濡れと相変化に焦点を当てている（Wang*, et al., *Phys. Rep.*, 2022）。これは、単一成分液体の濡れの確立された古典的な理論を補い、実際のシナリオでさまざまな界面プロセスの予測可能な制御を可能にする。

従来の研究は単成分液滴に限定されていたが、私は多成分・多相熱流体に対して複雑な数学モデルと波長選択的可視化技術を組み合わせた独自の手法を確立し、液滴の複雑な挙動と決定的な要因を解明した（Wang*, et al., *J. Fluid Mech.*, 2024; Wang*, et al., *Appl. Phys. Lett.*, 2024, Editor's Pick and 2024 Rising Star Collection; Press Release at Kyushu University website and EurekaAlert!）。特に多成分液滴の内部流動・濡れ・

多成分複雑熱流体の濡れと相変化（工学研究院・王振英）

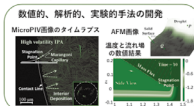
Key Point 1: From Nonvolatile to Volatile

1. Wang, Z., Karapetian, G., Valluri, P., & Tsouo, C. (2024). *Journal of Fluid Mechanics*, 987, A15.
- EurekaAlert! News Release, 20 May 2024
- Kyushu University Website, News Release, 20 May 2024
2. Wang, Z., Karapetian, G., Valluri, P., & Tsouo, C. (2024). *Applied Physics Letters*, 124(10), 104101 (Editor's Pick)

Key Point 2: From Single to Multi-component

3. Wang, Z., Orejón, D., Takata, Y., & Sefiani, K. (2022). Wetting and evaporation of multicomponent droplets. *Physics Reports*, 960, 1-37.
- Final name comments by Prof. Detlef Lohse; Citation: 192
4. Wang, Z., Karapetian, G., Valluri, P., Takata, Y. (2021). *Journal of Fluid Mechanics*, 912.
- First approach of mathematical description of multicomponent wetting

研究方法における重要性



産業応用における重要性



蒸発が毛細管力と熱・溶質マランゴニ効果の相互作用によって決定されることを世界で初めて明らかにした（Wang et al., *J. Fluid Mech.*, 2021）。多成分流体や混相流の問題解決に向けた新たな方法論的基盤を提供し、先進的な製造や薬物送達システム、化学プロセスなど、幅広い産業分野での応用も期待される。

女性教員のキャリア開発促進における伊藤教授の多大な貢献に感謝の意を表したいと思います。若い女性研究者は、仕事と生活の両立を恐れて研究をやめてしまうことがよくあります。伊藤教授のようなモデルが増えることで、私たちは力を得て、キャリアにおけるさらなる可能性を模索できるようになります。私は、社会に役立つ重要な研究に引き続き注力し、若い世代の女性研究者に「積極的に取り組む」力を伝えていきたいと思っています。

女子大学院生部門 最優秀賞 研究紹介

「転流機構と群落不均一性に基づく次世代収量予測: 収量構成情報の変動・分布の可視化」

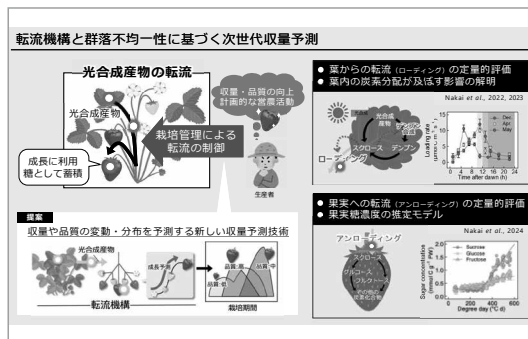


中井 鴻美
九州大学大学院
生物資源環境科学府
博士3年

この度、令和6年度伊藤早苗賞女子大学院生部門において最優秀賞を賜り、大変光栄に存じます。受賞に際し、指導教員である安武大輔准教授をはじめ、研究活動を支援いただきました研究室の皆様、ならびに家族に深く感謝申し上げます。

本研究で対象とした転流とは、葉で生成された光合成産物が葉以外の器官（果実や根など）へと輸送される現象です。光合成産物は転流先の器官の成長やエネルギー生成に利用され、さらに糖として蓄積されます。そのため、果実を収穫対象とする果菜類において、転流は収量や品質に直結する重要な植物の生理機能であると言えます。このような背景から、農家が行う栽培管理により果実への転流を制御できれば、収量・品質の向上、さらには計画的な営農活動の実現につながると考えました。しかし、生産現場での転流の計測は困難であるため、農業への応用には課題が多く残されています。

本研究では、農家による転流制御を目的とした栽培管理を策定するための手段として、転流の機構に基づき、実栽培スケール（群落、長期）で果実の成長、ひいては収量や品質の変動・分布を予測する新たな収量予測技術を提案しました。さらに、この技術の確立に向け、実際の生産環境に近



い圃場条件下における転流動態の評価やそのメカニズムの解明に取り組みました。はじめに、果菜類であるイチゴを用いて、葉における転流動態の日変化・季節変動を定量的に評価しました。また、圃場条件下、制御環境下の両方において、転流による葉からの光合成産物の送出速度と葉内の光合成産物の関係を解析し、葉内のスクロース・デンプン間の炭素分配が転流に及ぼす影響を明らかにしました。さらに、果実の成長に伴う転流動態の変化を解析し、果実内の糖濃度の変化を予測する数理モデルを構築しました。

本研究は転流に関する基礎的知見を得るとともにその農業への応用可能性を示すものであり、この成果が安定した作物生産の実現に貢献できれば幸いです。

Open Café2024 九大女子卒業生に聞く 「学生生活やキャリアについて」開催報告

令和6（2024）年11月2日（土）、「九州大学アカデミックフェスティバル&ホームカミングデー2024」が開催された。これにあわせて、男女共同参画推進室と九州大学女子卒業生の会「松の実会」の共催により、「Open Café 2024 九大女子卒業生に聞く『学生生活やキャリアについて』」をオンラインで実施した。

Open Caféは、本学を卒業したOGの方をお招きして、卒業後のキャリアや学生生活、仕事とライフイベントとの両立についてご講演いただくイベントである。今年で11回目を迎えた。コロナ禍でのオンライン開催を経て、昨年度から対面での開催に切り替えていたが、諸般の事情により、今年度はオンラインで開催することとなった。

今回は、本学理系学部を卒業した2名の方々に講師をお願いした。お一人は、山本有希氏（有限責任監査法人トーマツ）、もうお一人は、吉田梢氏（旭化成ファーマ株式会社）である。それぞれ、学生生活の過ごし方や卒業後の進路、キャリアのターニングポイントについて、ご自身の経験を振り返りながら講演いただいた。



山本有希氏
（有限責任監査法人
トーマツ）

山本氏は、平成17（2005）年に本学農学部を卒業した。現在は「有限責任監査法人トーマツ」品質・リスク管理本部に所属し、シニアマネジャーとして、上場企業等の監査業務等に従事している。

趣味は、スキューバダイビング。先日訪れた沖縄では、念願だった500ダイブを達成した。

山本氏は、これまでのキャリアについて次のように語った。

もともと、公認会計士を目指していたわけではなかった。高校時代は、漠然と管理栄養士になりたいと考えていた。恩師の勧めもあって、九州大学の農学部に進学したが、特に何かを目指していたというわけではない。はっきりとした将来は、まだ自分の中で思い描けていない時期だった。なんとなく「将来は結婚して、専業主婦になるのかな」と考えていた。自分の母親を見ても、また時代の雰囲気としても、それがまだ「普通」とされる時期だったと振り返る。

一浪して、地元長崎から九州大学農学部に入学。学生時代は、飲食店でのアルバイトに励む傍ら、サークル活動や友人たちとの旅行、遊び、社交ダンスにも精を出した。初めてスキューバダイビングに挑戦したのも、この頃である。卒業旅行は、アルバイトで貯めたお金で、生まれて初めてハワイを訪れた。

卒業後、知人の紹介で通信販売会社に就職した。自分で稼いだ給料だけでは、なかなか一人暮らしに余裕は持てなかった。仕事のストレスが溜まるなか、「このままでいいのかな」という疑問が徐々に芽生えていった。

転職を決意したのは、一年後である。自分の将来について自問自答した結果、やはり手に職をつけたほうがいいのではないかと考えるようになった。そのとき浮かんだのが、公認会計士という仕事だった。理系と文系の中間のような立ち位置であれば、自分にもチャンスがあるかもしれない。両親には、もう一度学校に通いたいので援助してほしいと申し出た。簿記すら勉強したことのない自分にとって、今思えば、殆どゼロからのスタートだった。

その後、猛勉強の甲斐あって、平成20（2008）年には見事論文試験に合格。晴れて公認会計士としてのスタートを切ることとなった。

公認会計士として働き始め、すでに10年以上が経つ。そのなかで経験した転機を、次のように振り返った。

まず、東京への異動である。福岡での業務に行き詰まりを感じていた頃、当時の上司から「東京事務所へ異動しないか」と声を掛けられた。それまでとは全く違う業務を任されることへの不安から、初めは前向きに捉えることができなかった。

しかし、誰にでも与えられるチャンスではないと思い直し、東京への異動を決意する。結果的にはたくさんの出会いに恵まれ、福岡に戻る頃には、名残惜しさを感じるほどだった。今では、あのとき東京への異動を提案してくれた上司に感謝している。

次に、「福岡県女性管理職ネットワーク（WE-Net）」への参加である。公認会計士の過半数は、今でも男性が占める。女性である自分は、男性より努力しなければ認めてもらえない。そう感じることも多かった。そんな折に出会ったのが、WE-Netである。そこで築いたつながりが、女性としてキャリアを歩む自分の背中を後押ししてくれた。とても頼もしく、心強くと感じる。

なんとなく結婚、なんとなく専業主婦。そう思い描いていた頃とは違って、今では、仕事中心の日々を送っている。管理職としての責任が増える一方、自分で仕事のやり方を決め、メリハリをつけて生活できることは、とても良いことだと思う。平日は仕事で慌ただしく過ごしている分、休日には、趣味のスキューバダイビングや観劇観賞、甥っ子たちと過ごす時間を大切にしている。

最後に、山本氏は「今すぐに何かを決める必要はない」と語った。そして、「学生のうちは、今しかできないことを存分に楽しんでほしい」と締めくくった。

吉田梢氏
(旭化成ファーマ株式
会社)



吉田氏は、令和3（2021）年に本学大学院工学府を修了した。現在は、旭化成ファーマ株式会社にて、医療用医薬品の安定的な供給にかかわる治験薬の開発に携わっている。

配属先は、医薬生産センター CMC 研究部と呼ばれる部署である。今年で入社4年目を迎えた。

CMC 研究部における治験薬の開発業務は、主に3つに区分される。そのなかでも、吉田氏が担当するのが「C（品質管理）」だ。「C（品質管理）」とは、治験薬の安全性・有効性を担保する評価方法や規格を確立することをいう。

普段の仕事は、分析法開発や品質評価とよばれる業務が中心となる。また、海外委託先とやり取りし、治験薬の製造と品質を評価するための協議を行うことも多い。そのため、一日の業務の大半を英語でのコミュニケーションに費やすことも珍しくない。

吉田氏は、これまでのキャリアについて次のように語った。

初めて自分の将来を意識したのは、高校生の頃だった。とはいえ、特に何かやりたいことが決まっていたわけでもなかった。幼い頃から水泳に打ち込み、身体を動かすことが好きだった。その一方、学校の授業も好きだった。特に、自分で仮

説を立て実験し、そこから得られた結果を考察する、その一連のプロセスを面白いと感じた。また、実験室レベルの小さなスケールから、よりスケールアップした工場での「製造」について「かっこいい」と思っていた。

高校卒業後は、恩師の勧めもあって、九州大学工学部に入学した。学生時代を一言で表すと、「よく学び、よく遊んだ」期間だった。いざ入学してみると、大学での学びが高校までのそれと全く違うことに驚いた。教科書ベースの授業とは異なり、日常で起きる様々な現象の原因を解明し、言語化して説明する。これがとても刺激的で、面白いと感じた。

その一方、サークル活動やアルバイトにも精を出した。それまでは水泳一筋で過ごしてきたが、大学から、新たにバレーボールを始めた。たくさんのおなじ趣味を持つ仲間と出会い、とても充実した学生生活を過ごすことができたと感じる。

研究の魅力に目覚めたのも、学部生の頃だった。選んだ研究室は、「生体材料・医用工学講座」である。細胞や臓器を対象とした保存技術の開発について、工学的な知見から研究する研究室だった。自分で立てた仮説に基づき、実験デザインを考案する。その実験から得られたデータについて、教授とディスカッションを繰り返す。これがとても面白かった。自分が納得するまで研究をやってみたい。その思いから、大学院工学府への進学を決めた。

大学院時代は、名づけて「スピードアップ よくばりキャリアプラン」だった。研究を続けたいと思う一方、早く社会に出て働きたいという気持ちもあった。指導教官には「それなら、短縮卒業を目指してはどうか」と勧められた。短縮卒業は、

卒業要件を満たすために、特に優秀な成果を収めなければならない。努力の末、修士課程を1年で修了し、博士課程を1年短縮して2年で修了することができた。そして、「旭化成ファーマ株式会社」に無事入社した。

社会人となった今も、毎日がステップアップの連続だと感じている。特に、入社間もない頃は、まだ右も左も分からなかった。上司や先輩には、「社会人とは何か」ということから教えてもらった。周りの温かいサポートに感謝している。

入社4年目となった今年、初めて部下2名を抱える自分のチームを持った。これまでと同じ治験薬の開発推進と、部下の育成をどのように両立させていくのか。頭を悩ませることも多い。上司にも相談しながら、奮闘する毎日である。

最後に、吉田氏は「人生には多くの分岐点が現れるが、そのたびに自分が大切にしたいことは何か、よく考えてほしい」と語った。そして、「大学とは、その答えを自分に教えてくれる素敵な場所」だと締めくくった。

交流会

後半では、二つのグループに分かれて交流会を行った。筆者は、グループAに参加した。参加した学生からは、将来の進路の決め方や、学生時代にやっておいてよかったことについて、活発な質問が寄せられた。学生の質問に真摯に答えるお二人の姿から、その誠実なお人柄と、これまで努力を重ねてきたことで身についたであろう自信を見てとることができた。

終了後のアンケートでは、「自分のキャリアを考える良いきっかけになった」「お二人とも自分との共通点があったので、参考になる部分がたく

さんあったし、聞いてよかった」などの感想が寄せられた。限られた時間ではあったが、参加者それぞれが、自分のキャリアについて考える大変有意義な時間であった。

(男女共同参画推進室 相良祥子)



九州大学男女共同参画推進室主催
九州大学女子卒業生の会「松の実会」共催

オンライン開催に変更しました!

OpenCafe2024

～九大OGキャリア講演会 & 交流会～

2024 11/2(土) 13:00~14:30

場所: オンライン開催(要事前登録)

対象: 在学生・高校生・一般の方

参加費: 無料

様々な分野で活躍する九大OGをお招きして、これまでのキャリアやプライベートについてのお話を伺います。おひとりは、農学部を卒業後、企業に就職するも、一念発起して会計士試験に合格され、公認会計士として活躍の山本有希さん。もうおひとりは大学院工学府を修了後、旭化成ファーマ株式会社で活躍されている吉田梢さんです。講演の後はお二人で質疑したり、おしゃべりしたり、ざっくばらんな交流会を開催します。学生の方も、聴いている方も、どなたでも、男女問わずご参加お待ちしております。

有限責任監査法人トーマツ
山本有希さん
2005年
農学部卒業

旭化成ファーマ株式会社
吉田梢さん
2021年
工学府修了

令和6年度女性職員エンカレッジメントセミナー 「先輩女性管理職に聞く 第2弾 ～私らしく働くために～」



永野間氏



高橋氏

話題提供者：永野間昌代氏（九州大学医系学部等事務部長）
高橋かおり氏（佐賀大学ダイバーシティ推進室副室長）

日時：令和7年1月9日（木）13：00～14：30
オンライン開催

令和3年度に第1回目を開催した女性職員向けのエンカレッジメントセミナーも、今年で4回目を迎えた。本セミナーは本学の女性事務職員を対象として、上位職への登用促進、仕事に対するモチベーションアップを目的として開催している。第1回目は、「先輩女性管理職に聞く」として、管理職のロールモデルお二人を紹介した。2回目、3回目は仕事に関わるスキルについて専門家を招いてセミナーを開催してきた。セミナー後に実施するアンケートで、身近なロールモデルの話を聞きたいという声が多くあった事から、今回は「先輩女性管理職に聞く」第2弾として企画し、お二人の女性上位管理職から話題提供いただいた。なお、当日は学内4つのキャンパスから職員だけでなく教員を含め70名の参加があった。

以下、本セミナーの概要を紹介する。

永野間昌代氏 （九州大学医系学部等事務部長）

今回のセミナーを前に、周りの女性職員にヒアリングしたところ、経験談を聞きたいという要望が多かった事から、ご自身の経験談や、それに基

づくアドバイスをいただいた。まず最初に永野間氏の略歴について紹介された。九州芸術工科大学に入職し、2003年に九州大学との統合、2004年に国立大学の法人化という変革の時代を乗り越え、2006年に初めて九州大学の部署に係長として配属。組織もルールも異なる中、また、当時は理解の進んでいなかった男女共同参画の担当として、非常に苦勞しながら出産育児期の支援制度や学内保育所の設置などに取り組み、両立支援を構築してきた。多忙な中で出産育児を経て復職し、キャリアを継続。様々な部署、役職を歴任し、未知の部署での仕事やライフイベントなど、公私に渡って幾度も困難な状況に直面し、乗り越えた経験について具体的にお話しされた。



続いて九州大学の現状について説明された。法人化から20年が経過し、女性職員の割合も増加。

女性管理職の割合も20%を超え、来年度の目標である25%も達成できるのではないか。その一方で、昇任に対する不安やマネジメントへの苦手意識が影響して、管理職を希望しない人が増え、特に女性にその傾向が見られる。しかし、どのような職位であっても責任は伴い、また職位が人を成長させる側面があるため、管理職に挑戦して新たな可能性を広げてほしいと励まされた。

次にご自身について振り返り、40年を超えるキャリアにおいて、常に仕事も家庭も全力で取り組んできたことが誇りであり、自信になっていると述べ、育児休暇や病気休職の際には、復職時に焦りもあったが、周りの人と助け合うことができれば乗り越えられない壁はない、周囲との相互理解を大切にしたいと訴えた。自身の基礎を築いた就職当時の女性上司を紹介すると共に、様々なキャリアを築いた4名の本学女性職員をロールモデルとして紹介し、強い思いがあれば叶う、始めるのに遅すぎることはない、チャレンジを恐れないことを忘れないで欲しい、と伝えた。「人生の時間は限られており、必要とされることは幸せなこと」「今後の人生を豊かなものにできるかどうかは自分次第」と後輩へメッセージを贈り、最後に、「大学人として、常に志を高く、プロ意識、誇り、プライドを持ったワンランク上のありたい自分を目指してもらいたい」「みなさんは既に誰かのロールモデルであり、胸を張って歩んで欲しい」と締めくくられた。

高橋かおり氏

(佐賀大学ダイバーシティ推進室副室長)

まず、冒頭で高橋氏の略歴について紹介された。1982年に佐賀医科大学に入職し、2003～2004

年には旧佐賀大学との統合、国立大学法人化という激動の時代を経験。仕事を続ける中で、出産、育児、放送大学への入学と卒業、ブロック課長登用試験による大分大学への異動、大学院入学など、公私において様々なチャレンジをしながら、キャリアとライフイベントを両立されてきた。

続いて、ご自身がチャレンジしてきたことを詳しく紹介いただいた。1つ目が放送大学への入学と卒業である。出産育児と仕事の合間を縫って、4年で卒業。社会人になって自分の稼いだお金で、自分の時間で、自ら勉強しようと思ってやることにとても充実感を感じたと述べられた。2つ目のチャレンジは九州ブロックの国立大学法人課長登用試験であった。試験に合格し、2014年の4月からは大分大学の国際交流課長として着任。経験がない国際交流業務に就くことになったが、関係資料や施策を必死で学び、4年間の課長職を乗り越えた。3つ目のチャレンジは二度目の大分大学赴任時の大分大学大学院経済学研究科博士前期課程入学である。仕事が終わった後にオンラインでの講義を受けながら修士論文を書き上げ、2024年9月末に「経営学」の修士号を取得した。



次に大学院で「女性活躍推進における現状と課題—九州地区国立大学法人女性管理職を事例として」というテーマで、事務職員、女性管理職を題材にした修士論文に取り組んだ経験から、九州

地区の大学における女性管理職の現状についてデータを用いて示された。九州内11国立大学における（8大学が総合大学、3大学が単科大学）2024年の課長相当職以上は18.4%という状況であり、右肩上がりにはなっているものの、2030年までに30%以上と掲げている政府の目標値達成には相当の努力が必要となる。女性管理職の増加が喫緊の課題でありながら、家庭生活との両立の難しさやロールモデルの不足から女性管理職に積極的になれない女性が多い現状について危惧された。資質があるからこそ声がかかるのだから、チャンスがあれば是非チャレンジして、九州地区の女性管理職が増えるようみんなで頑張りましょうと激励した。

最後にワークライフバランスとご自身の仕事の流儀や心がけていることについて紹介された。20代後半から習い始めた日本舞踊で2023年に師範の免許を取得。これまで、海外で日本文化について紹介したり、学内のイベントで着物の着付けや祝舞の披露なども行ってきた。世の中のために貢献したいという思いも強く、今後は日本舞踊や和について取り組む活動をするNPOを作りたいとも述べた。後輩へ向けたアドバイスとして「仕事だけでなく、楽しみや趣味を持つこと」「一生勉強一生青春」との言葉を贈られた。

質疑応答・意見交換・アンケート

お二人による講演の後には質疑応答・意見交換の時間が設けられた。まず、お互いの話を聞いた感想について、永野間氏は「本当にすごいという一言です。仕事をしながら子育てもしながら、勉強もして、ぜひ皆さん真似ていただきたい。一生勉強だと思います。」と、これに対し、高橋氏

は「いろいろ苦難を乗り越えられて、今もこうやって現役で部長職をされていていらっしゃるの本当に感動しました。これからもお体にご留意されど活躍されますように。」と述べた。



続いて、仕事と子育てを両立する上で、心がけていたことについて尋ねられ、高橋氏は、「保育園のおかげ。ただ、送り迎えの車の中など、短い時間でも濃密な関係ができるよう愛情かけて接してきた。」と、永野間氏は「仕事が忙しくて、平日はほとんど相手ができなかったが、土日はずっと一緒に遊んでいた。子どもというよりは、人間として接してきた。」と回答した。

開催終了後のアンケートでは、大変満足度が高く、「常に勉強、自己研鑽を続けることが大切であるという言葉が非常に印象に残りました」「今後の自分の生き方を考えるうえでとても良い刺激を受けました」「男女問わず、職位問わず、もっとたくさんの方に聞いていただきたい会でした」などの感想が寄せられた。

女性管理職の増加が求められながらも、管理職を希望しない職員が増えている中、身近なロールモデルの経験談やアドバイスは将来を描くヒントを持ち帰る有意義な時間となった。

（男女共同参画推進室 加藤悠紀）

「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」事業の活動 —「先端型」進捗状況—

九州大学は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」のうち、特色型（2015～2020年）、先端型（2019～2024年）、調査分析（2021～2022年）の3つに採択された。本報告は、本年度補助事業としての最終年度となる先端型の本年度の進捗状況と6年間のまとめを報告する。

ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）

「先端型」は、女性研究者の海外派遣等を通じた上位職登用の一層の推進に対する支援である。九州大学は総長をトップとする全学体制で、コーディネータを務める担当副学長を中心に「ダイバーシティ・スーパーグローバル教員育成研修（SENTAN-Q）」を推進してきた（<https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/>）。

SENTAN-Qの目的は、優れた研究業績を有する将来有望な女性ならびに若手教員に対し、世界トップレベルの研究教育力を実践的に身につける

表1 SENTAN-Q各研修ステップ

STEP 1 透明性の高い審査による研修生の選出
STEP 2 大学ガバナンス、ダイバーシティ・インクルーシブ教育
STEP 3 英語でのアクティブラーニング型教授法教育
STEP 4 留学生への英語での実践的研究指導
STEP 5 最新学問分野等のリカレント教育
STEP 6 最終試験：海外での実践的教育・研究指導

機会を与え、世界と伍して戦える真に実力のあるダイバーシティ・スーパーグローバル教員として育成することである。毎年男女10名ほどの研修生を選定し、2年間にSTEP1～6の国際研修を実施する。研修終了後合格認定を受けた研修生は、1年以内にテニュアトラック教員はテニュアの取得、あるいはテニュア教員は1段階の昇任が予定されている。

既に本誌で研修の概要は繰り返し紹介しているため [1]、各STEPの概要のみ表1に示す。

1. 本年度の実施状況

4期生（女性8名、男性2名）研修期間2022年8月～2024年7月

ライフイベントによる研修期間延長者1名を除き、9名が研修を修了した。総長から直接SENTAN-Q修了認定書を授与され、その後順次一段階の昇任が続いている。また期間延長者もSTEP6の海外研修に取り組んでいる。

5期生（女性7名、男性3名）研修期間2023年8月～2025年7月

7月までにSTEP4研修で、海外メンターのもと学生指導の国際スタンダードを学び、学内留学生への実践的研究指導を行い、国際共著論文を仕上げた。8月からはSTEP6の海外研修に取り掛かり、海外メンターのもと既に一部の研修生が海外渡航先での研究指導、共同研究、講義を実施中である。

また並行してSTEP5の最新学問分野等のリカレント教育に取り組み、学内教員を講師に自らの専門と異なる分野の学び直しを進める中、学際共同研究に発展している事例もある。

6期生（女性7名、男性2名）研修期間2024年8月～2026年7月

7月に開催された審査会（STEP1）での英語による面接審査を経て、9名が研修生に選定された。審査委員は「無意識のバイアスチェックシート」[2]への署名が求められている。研修は8月から開始した。各研修生は5期生までと同様、2分程度の動画で紹介している（<https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/trainee/>）。

STEP2研修では、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校Sean C. Garrick副学長による“A vision for equity, diversity and inclusion”の講義を、カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）Corinne Peek-Asa研究担当副学長による“UC San Diego Research: A Global Research & Innovation Powerhouse”の講義を、対面で10月に実施した（写真1参照）。

1月最終週にはUCSDの専門家チームを招聘し、STEP3 英語によるアクティブラーニング型教授法研修を対面にて実施した。前半は学生教育の目的やスキルに関する講義を受け、後半は研修生自

身の模擬講義の実践指導であった（写真2参照）。

STEP2、3に加えて、8月からSTEP4の留学生研究指導とSTEP5のリカレント教育も並行して実施している。

2. 6年間の実績

SENTAN-Q研修は開始初年度を1期生とし、これまでに6期生までの研修生選定を行った。その内訳を表2に示す。男女同数の目標は前半3年ではほぼ達成したが、後半3年間で女性の比率が増加した。男性は若手を対象としたため、職位では圧倒的に助教が多く、女性は准教授が一番多い。

2025年3月現在、ライフイベントにより期間延長した4期生1名を除き、4期生まで40名が2年間の研修を修了した。3期生までの30名の修了後の昇任は、テニュアトラック教員からテニュア教員へ昇任した者が2名で、それ以外の28名が全員1段階昇任している。4期生も研修修了直後より順次昇任が始まり既に7名が昇任済みである。以上を総合すると、本研修修了生から、女性の教授12名、准教授10名が誕生し、また男性の教授1名、准教授14名、テニュア助教1名が誕生している。

研修実績は、毎年本誌や年次報告書で紹介しているSTEP2、3以外のSTEP4～6の実績を紹介す



写真1 2024年10月4日 STEP2研修



写真2 2025年1月28日 STEP3研修

表2 SENTAN-Q 研修生の性別及び職位

	女性	男性	准教授	講師	助教
1期生	8	2	5	1	4 (2)
2期生	5	5	2 (1)	3 (1)	5 (3)
3期生	4	7	3 (1)	0	8 (6)
4期生	8	2	5	0	5 (2)
5期生	7	3	5	1	4 (3)
6期生	7	2	4	0	5 (2)
合計	39	21	24 (2)	5 (1)	31 (18)

職位は研修開始時、() 男性内数

る。個別の実績は年次報告書 [2] で確認できるため、修了分の全体数を表3に示す。

STEP4及び6では、各分野のトップレベル研究者である海外メンターが、それぞれ20カ国(地域)近くに及び、学生研究指導、共同研究を通じて国際的なネットワークが広がった。海外での講義は複数大学で実施する例が多いため、4期生までで26カ国、101大学に及んでいる。

STEP5のリカレント教育ではこれまで研修生と接点のなかった学内他部局、異分野の研究者と対話をすることで共同研究・学際研究にも繋がった。研修生・講師双方に相乗効果をもたらしており、SENTAN-Q研修の長所の学内周知にも繋がった。

海外メンターや指導する学生、講義を行う大学、そしてリカレント教育の講師は全て研修生が自ら交渉し、選定している。海外研究者や大学、初めてコンタクトする学内異分野教員など、先方との

表3 STEP4-6 研修実績

STEP	研修内容	研修生人数	海外メンター／講師	所属
4	留学生指導	51名 (1～5期生)	19ヶ国(地域)	53大学等
5	2科目以上 リカレント教育	40名 (1～4期生)	学内26部局63名	(学外1名)
6	海外学生指導	40名 (1～4期生)	18ヶ国(地域)	44大学等
	海外講義		26ヶ国(地域)	101大学

交渉に苦勞した研修生も少なくなかった。しかし、その過程を経たことが、その後の大きな自信につながり、修了後の活躍を後押ししている。

3. SENTAN-Qの意義と成果

SENTAN-Q研修実施の意義は、そのユニークさ、挑戦性も含めて、①女性研究者上位職登用を通じた人事の流れの正常化、②将来の女性幹部候補生の輩出、③長期的ビジョンでの真に公平な大学環境の実現、④モデル事業としての女性研究者の活躍促進の4項目が上がっている [3]。

このうち幹部候補生の輩出に関しては、既に研修修了後、部局内の重要な役割を任せられていた研修生もいたが、2024年10月には大学執行部の副理事にSENTAN-Q修了生の2名の女性教授が就任するなど着実に成果が上がっている。

次に研修を進める中で得られた成果としては、①研究業績だけに頼らない人事評価の意義、②メンター制度の効果、③明確で具体的な目標設定をすることの意義、④ジェンダーバイアス問題などの優位的な立場がマジョリティとマイノリティの集団組成に起因すること、以上4つが挙げられる [3]。

4. SENTAN-Qの波及効果

SENTAN-Q研修は2年間の国際研修を通じて国際通用性のある教員を育成し、最終試験合格後に一段階昇任させるユニークな事業として開始当初より注目を集めた。開始3年目の事業の中間評価では総合評価「S」を獲得し、翌年度から開始されたダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ「女性リーダー育成型」の創設にも影

響を与えた。

コーディネータの玉田薫副学長は開始当初より SENTAN-Q の事業内容や成果を説明する講演の依頼や取材を多数受けており、本年度も 2025 年 3 月に日本薬学会ダイバーシティシンポジウムで講演の予定がある。

また、何より学内で SENTAN-Q 研修の相乗効果として女性上位職が増加しており、事業開始前（2019 年 5 月）と、本年度当初（2024 年 5 月）を比較すると女性教授は 41 名から 62 名へ、女性准教授は 96 名から 106 名へと増加しており、これに本年度研修を修了した 4 期生の昇任がさらに加わる予定である。

5. 今後に向けて

SENTAN-Q 研修は本年度で文部科学省の補助事業としての期間は終了するが、来年度から大学自主事業として継続することが決まっている。現在研修途中の 5 期生、6 期生も当初の予定通り研修を継続する。2 月末からは 7 期生の募集が開始された。SENTAN-Q の研修を通じ、性別、年代、職位、分野を問わず、多様な人材が共に学ぶ、あるいは共に活動する機会を提供することで、大学研究者から無意識のバイアスを排除し、真に公平な大学環境の実現に繋がることを期待される。

また「先端型」事業と並行して 2021～2022 年に実施した調査分析事業「女性活躍指標に基づく女性研究者活躍促進に関する国際調査」において、論文業績の男女比較を通じて定量的に評価する方法を試みて分析した成果が、論文として 2024 年 10 月に国際学術誌に掲載された [4]。

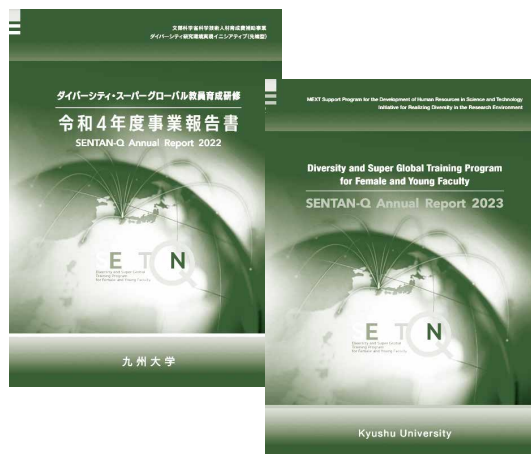
九州大学は本事業の「特色型」による環境整備を基盤に、「調査分析」で得られた課題とその解

決策を実践し、「先端型」で国際通用性のある教員を育成し、女性上位職を輩出しながら、今後も研究環境のダイバーシティ推進に努めていく。

（男女共同参画推進室 上瀧恵里子）

参考情報等

- [1] ポリモルフィア Vol.6, pp.48-51 (2021 年 3 月) [ISSN 2424-1113], Vol.7, pp.49-52 (2022 年 3 月), Vol.8, pp.50-53 (2023 年 3 月)
- [2] SENTAN-Q 年次報告書 <https://sentan-q.kyushu-u.ac.jp/report/>
- [3] ポリモルフィア Vol.8 pp.20-33 [ISSN 2424-1113]
- [4] Evaluation of the Gender-Neutral Academic Climate on Campus for Women Faculty in STEM Fields, K. Tamada, et al., International Journal of Educational Research Open (IJEDRO), Vol.7, 100390 (2024). DOI: 10.1016/j.ijedro.2024.100390.



SENTAN-Q 年次報告書

